

# 活力のある五木、五木らしさを生かした五木 —居つきたくなる五木振興作戦—

居つき隊五木

内野 香織<sup>1</sup>・堀口 彰史<sup>2</sup>・ウエンティ トウ フォン<sup>3</sup>・長谷部 俊之<sup>4</sup>

<sup>1</sup>熊本大学 大学院社会文化科学研究科 博士前期課程1年

<sup>2</sup>熊本大学 大学院社会文化科学研究科 博士前期課程1年

<sup>3</sup>熊本大学 大学院社会文化科学研究科 博士前期課程2年

<sup>4</sup>熊本大学 政策創造研究教育センター 政策研究員

本稿は持続可能な地域社会の形成というテーマの中でも、条件不利地域といわれる中山間地域のうち熊本県球磨郡五木村の振興、とりわけそこに住む村民が持続的に生き生きと暮らすにはどうするべきかという問題意識に立脚し、その対応策を提言するものである。まず、(1)観光（来村者質問紙調査）、(2)産品（物産館実態調査）、(3)五木村の生活・特色（住民ヒアリング調査）の3つの視点から現地調査を実施し、五木村の振興に関する課題と潜在的な有用資源について考察した。その考察に基づき、著者らは村に潜在的に存在する観光資源や産品、生活習慣等の「五木らしさ」を生かして、村外の客を呼び込むと共に、その存在によって村内に新たなコミュニティを形成し、村民と村外を結びつける場としての機能を持つ「茅葺の里」をつくることを提案したい。

## 1. はじめに

熊本県球磨郡五木村は熊本県の中南部、人吉市の北に位置し、面積は25,294ha、村の97%が山林である。五木村の現状は以下のとおりである<sup>1)</sup>。

### (1) 人口の減少

五木村は現在、過疎化、少子高齢化という問題に直面している。現在、五木村の総人口は1,373人（556世帯）で、男性は655人、女性は718人である（2009年9月30日現在）。人口は、1965年の4,981人に比べ6割以上減少している。年少人口（14歳以下）は約11%、老年人口（65歳以上）は約40%であり、県内で最も少子高齢化が進む地域である。五木村振興計画（仮称）素案によると、将来人口推計では2030年には762人まで減る見込みである。人口減少による地域コミュニティの崩壊が進んでいる。

### (2) ダム問題

建設省から川辺川ダム計画が1966年に発表され、「ダムによる水没という大きな犠牲を強いられる」として同年に五木村議会は反対を決議した。しかし、林業等の衰退、過疎化、少子高齢化などの時代背景の中、ダム受入を前提とした地域整備計画や代替地、補償の提示などがあった。このような状況の中、1981年には3つの水没地住民団体が補償基準に妥

結した。また、それに引き続き、1982年1月には村長によるダム建設同意による所信表明により「苦渋の選択」がなされた。その後、清流川辺川を守る民間自然保護団体の活動などの反対などもあったが、代替地や社会基盤の整備が進み、ダムを前提とした村づくり計画が作られ、村のダム本体工事着工同意もあり関連事業が進められてきた。しかし、その過程の中で多くの離村者を出し人口は減少の一途を辿った。現在、民主党へ政権が交代しダム工事中止の流れとなる中で、中止になった場合の五木村のあり方や水没予定地の今後の利用方法も考えていく必要が出てきた。

### (3) 村づくりの計画

2008年に「ふるさと五木村づくり計画（案）」が定められた。この計画の主な目的は、五木をさらに豊かなものとして次代に伝えるため、自然と共生し潤いと安らぎのある住みよい集落や歴史と文化を背景に新しい交流の舞台となる、生き生きとした美しい村づくりに取り組むことである。そして、川辺川ダム計画に翻弄された五木村振興のための「ふるさと五木村づくり計画」は、県の五木村振興推進対策本部でまとめられた。2008年からの10年間で村の振興を図り、2009年度は74事業を進める。事業の中には、財源の一部に自公政権時の経済対策を当ててるものもある。

2008年9月にダム計画反対を表明した蒲島知事が村の振興の姿勢を示し、県と村が共同で振興計画づくりに取り組んだ。事業は、働く場作り（雇用の拡大など）、暮らし作り（医療福祉の充実など）、人づくり（人材育成）が三本柱である。観光、交流拠点施設の機能強化、猿、鹿被害対策の強化、光ファイバーによる通信網の整備や携帯電話エリアの拡大などを重点的に進めることが謳われている。中でも観光という視点が重視されており、五木村らしさを生かした具体的な観光対策が望まれている。

## 2. 提言の方向性

私達は今、長年のダム問題により疲弊している五木村を活性化しつつ、住民が持続的に元気に暮らせるようにするための政策を提案したい。そのために3つの側面から五木の課題の解決を図る方策を検討する。1つ目は、観光である。少子高齢化の状況で、内発的な振興に加えて外との交流による振興を目指して計画の中心に観光が据えられているが、これまで来村者の実態的な調査がなされなかったことから来村者質問紙調査をし実態を把握する。また、2つ目が産品である。観光による来訪者に対する資源の掘り起こしとそれによる地域興しの視点により、産品およびその域内での販売の現状を分析する。そして、3つ目が集落である。五木村の村民の生活の実態について住民ヒアリングという手法で集落調査を行い、特徴や課題を抽出して地域振興のポテンシャルについて分析する。

## 3. 現地調査から見た現状

### (1) 来村者に対する質問紙調査

2009年9月18日(金)、19日(土)、24日(木)、26日(土)、27日(日)、10月1日(木)の6日間に渡って、道の駅：「子守唄の里五木」の駐車場で来村者全141組に対して質問紙調査を行った。こ

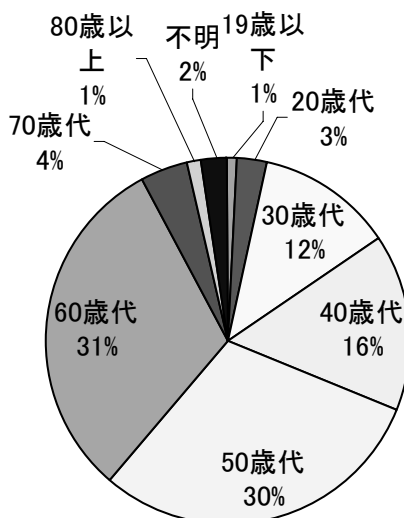
の調査では、五木村の来村者の構成や行動パターンを調査した。

a) 五木村来村者（年代別）

表－1、図－1では、60歳代が44人（31%）、50歳代が42人（30%）の両者で全体の過半数を占めている。上記のデータにより来村者の主軸は50歳代、60歳代で、それらの年代から外れるにつれて来村者の割合が減っていることが分かる。70歳代以上や19歳以下の来村者に関しては年齢的な問題もあり、割合が少ないのも仕方がない部分はある。しかし、ここで特に問題なのが20歳代の来村者の割合の少なさである。若者にはあまり観光地としての魅力が伝わっていないことを伺わせる。

表－1 五木村来村者（年代別）

年齢	19歳以下	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代以上	不明	計
人数	1	4	17	22	42	44	6	2	3	141



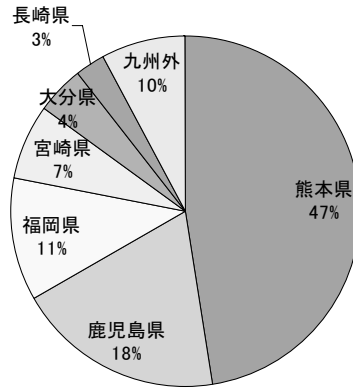
図－1 五木村来村者（年代別）

b) 来村者の発地（都道府県別）

表－2、図－2では、熊本県が67組であり全体の約半分（47%）を占め、続いて鹿児島県が27組（18%）となっている。熊本県と隣接する福岡県、宮崎県、鹿児島県が上位2位から4位を占めており、来村者の発地は地理的条件が大きく影響していることがわかる。熊本県は九州の中心に位置しているため、時間の面や負担の面からも九州内の他県に比べ比較的行きやすい環境にある。中でも九州南部に位置する宮崎県や鹿児島県は、北部に比べ来村する割合が高い。また九州外の都道府県の合計は全体の約1割しか占めていないことから五木村の魅力が全国的にはまだ浸透していないと考える。今年はマスメディアで取り上げられることも多くなった五木村ではあるが、ほとんどがダム問題に関することであり、観光面を含めて五木村全体を紹介した報道は少ないものと思われる。

表一 2 来村者の発地（都道府県別）

県名	熊本県	鹿児島県	福岡県	宮崎県	大分県	長崎県	九州外	計
組数	67	27	16	10	6	4	11	141



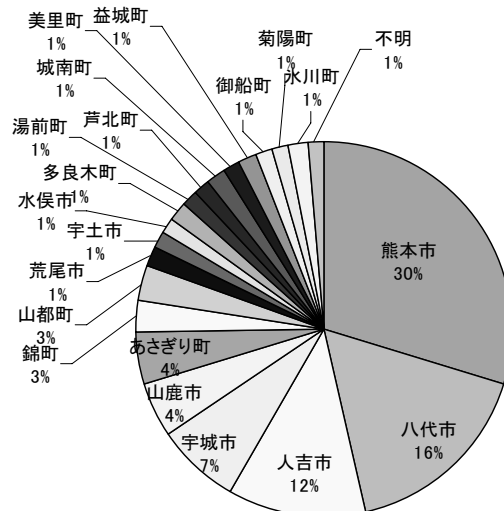
図一 2 来村者の発地（都道府県別）

c) 来村者の発地（熊本県内市町村別）

表一 3、図一 3 では、熊本市が20組で全体の 3 割を占めている。続いて八代市が11組（16%）、人吉市が 8 組（12%）となっている。今回の調査で来村者の発地は、県内北東部の阿蘇地域や西部の天草地域を除いて県全体に広がっていることが分かった。その中で北部より中、南部の市町村が多いことも分かった。五木村の来村者の数自体は多くは無いが、来村者の発地範囲が広いということは、県内全域で五木の知名度はある程度浸透しているといえる。しかし、2008年に限っても五木村の観光客総数は120,951人で熊本県の観光客総数（58,115,500人）に占める割合がおおよそ0.2%であり、全体的には依然として絶対数が足りない状況である。

表一 3 来村者の発地（熊本県内市町村別）

	熊本市	八代市	人吉市	宇城市	山鹿市	荒尾市	宇土市	水俣市	上益城郡(4)		
									山都町	益城町	御船町
組数	20	11	8	5	3	1	1	1	2	1	1
	球磨郡(7)				葦北郡(1)	下益城郡(2)		菊池郡(1)	八代郡(1)		
	あさぎり町	錦町	多良木町	湯前町	芦北町	城南町	美里町	菊陽町	氷川町	不明	計
組数	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1	67



図一 3 来村者の発地（熊本県内市町村別）

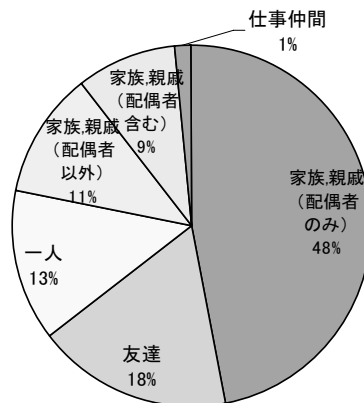
d) 来村者の属性

表－4、図－4では、「配偶者のみと来た」が66組で全体の約半分（48%）を占めている。続いて「友達と来た」が25組（18%）となっている。それに対して、「仕事仲間と来た」が2組（1%）、「配偶者を含めた家族、親戚と来た」が13組（9%）となっている。

今回の調査で配偶者以外の家族と一緒に来村する人の割合が少ないことが分かった。「友達」や「一人」の場合よりも配偶者以外の家族と来村している場合が少ないことは意外であった。来村者からは、「子供たちが遊ぶ場所がない」という声が多かった。五木村には後世に伝えるべき自然や文化が多くあるが、それは子供たちには十分には伝わっておらず、また興味も与えられていない状況にある。しかし現在の観光客の幅を広げていく上でも、子供たちにも受け入れられるような体験型のイベントが必要であると考ええる。

表－4 来村者の属性

属性	家族、親戚 (配偶者のみ)	友達	一人	家族、親戚 (配偶者以外)	家族、親戚 (配偶者含む)	仕事仲間	計
組数	66	25	19	16	13	2	141



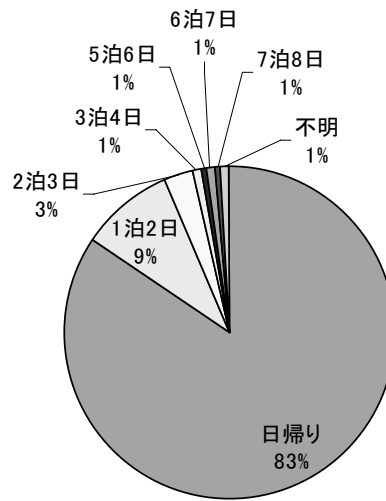
図－4 来村者の属性

e) 宿泊状況

表－5、図－5では、日帰りが119組で大半（83%）を占めている。「宿泊する」の回答の中では「1泊2日」が最も多く13組（9%）であった。五木村は慢性的に宿泊施設の不足が続いている。五木村役場が発行している「五木村観光ガイドBOOK」では掲載されている宿泊施設は7軒しかない。その宿泊施設も大規模なものではなく、宿泊可能な人数も多くはない。その上ダム工事関係者が多く利用しており、観光客が泊まれる人数は限られているということである。今回の調査で五木村に来て泊まってみたいという声も聞かれたが、現実には空きが少ない状況である。このことが五木村の観光客は日帰り客が多い要因の一つでもある。

表－5 来村者の宿泊状況

	日帰り	1泊2日	2泊3日	3泊4日	5泊6日	6泊7日	7泊8日	不明	計
組数	119	13	4	4	1	1	1	1	141



図－5 来村者の宿泊状況

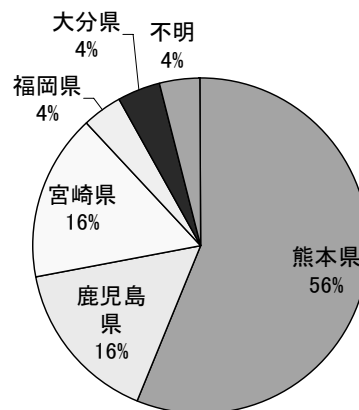
f) 宿泊場所（都道府県別）

表－6、図－6では、熊本県が14件（56%）であり、鹿児島県と宮崎県が同数で4件（16%）と続いている。地元の熊本県を除くと上位は九州南部の県が多い。特に鹿児島県や宮崎県は今回以外のデータでも上位に位置しており、他の県に比べて特に人的交流、移動が多いことが分かった。

表－6 来村者の宿泊場所（都道府県別）

県名	熊本県	鹿児島県	宮崎県	福岡県	大分県	不明	計
件数	14	4	4	1	1	1	25

※複数の県で宿泊した来村者がいるため、実際の来村者の組数とは一致せず。



図－6 来村者の宿泊場所（都道府県別）



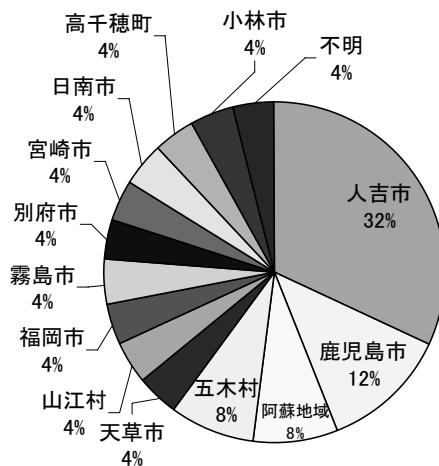
g) 宿泊場所（市町村、地域別）

表一七、図一七では、人吉市が8件で全体の約3割を（32%）占めている。続いて鹿児島市が3件（12%）、阿蘇地域と五木村が同数で各2件（8%）となっている。図一五より五木村の来村者の17%しか宿泊していないことが分かったが、図一七ではさらに宿泊する来村者の中でも五木村に宿泊をする来村者が8%しかいないことが分かった。全体的に見ると、宿泊した組は来村者全141組中2組である。五木村が宿泊客を増やす方向を目指しているならば、この結果は極めて厳しいものである。

表一七 来村者の宿泊場所（市町村、地域別）

	人吉市	鹿児島市	阿蘇地域	五木村	天草市	山江村	福岡市	
件数	8	3	2	2	1	1	1	
	霧島市	別府市	宮崎市	日南市	高千穂町	小林市	不明	計
件数	1	1	1	1	1	1	1	25

※複数の市町村、地域で宿泊した来村者がいるため、実際の来村者の組数とは一致せず。



図一七 来村者の宿泊場所（市町村、地域別）

(2) 農産物、産品の現状

現状の分析に当たって、農林業については、2009年9月18日(金)に実施したJA五木と五木村森林組合長へのヒアリング調査による。また、産品直売所については9月18日(金)から22日(火)にかけて、それぞれの店舗や組織の代表者、役員、従業者等への聞き取り調査を取りまとめたものである。

a) JA

現在出荷しているのは栗、茶、椎茸である。栗を栽培しているのは39名、猿、鹿の被害により、栗生産への意欲は減退し、生産量は全盛期の4分の1である。猿は昔からいたが人里に来てまでは作物を荒らさなかった。ハンターも猿を殺すのには抵抗がある。お茶の加工農家は1戸である。お茶は標高が高く朝夕の温度差があるので味に深みがある。農業だけで生計を立てている「認定農業者」は3名のみである。販売農家は約50戸で、米が最も多く、次いで椎茸、ニンニク、セリなどである。自家消費が多く、道の駅などに出荷する程度である。

水稻の共同作業や米を売って儲るという発想が無い。自家消費分のみ作っている。

b) 森林組合

1961～1963年ごろが五木村の最盛期（人口集中期）で、ほぼ自給自足で、産業の中心は炭焼、和歌山や四国から炭を作りでお金はないが、人が行き来していた時代である。

1961～1979年頃まで植林で山の仕事は収入源であり、生計を立てていた。それから造林面積は縮小する一方である。現在は人工林の間伐は直接国や県の事業を請け負って山の仕事の約9割を森林組合が請け負う状態である。

植林してから出荷まで、1ha当たり200～300万の経費がかかる。今は需要不足などその3分の1も取り戻せない。

椎茸はすぐ現金化できるが、原木などコスト高で3分の1ほどの収益にしかならないので、椎茸を作って生計を立てていくことは難しい。鳥獣害も多い。

c) 産品を扱う店と産品の現状<sup>2)</sup>

産品を扱う店舗の形態と一次産品・加工品の現状を表-8、表-9、表-10に示す。

表-8 店舗の形態

店舗名	形態	備考
子守茶屋	農産品は唯一椎茸のみ。他は自社製の加工品および、その他の自家製加工品等販売	家族の経営
道の駅（山の幸）	温泉施設および食堂も併設で、季節ごとのイベントなど開催。産品等はすべて仕入れ	経営第三セクター（株）子守唄の里五木
瀬目公園（四季の里）	建設省が整備した瀬目公園の一角で、物産直売所をマロン会が受託管理。通常はマロン会で作った産品を中心に販売していたが、現在休止中	体調不良や高齢化により、店は休止中
九領庵	自社製品であり核となる「山うにどうふ」を中心に、工場の直売所と、村の中心部に販売所（2階に蕎麦屋）の2店舗を構える	自営の店舗のほか、道の駅、百貨店、首都圏の物産館にも出荷

表-9 一次産品（物産館等を集約）

季節	産品	生産場所等
春	生椎茸、葉わさび、山菜（さどわら、ぜんまい、蕨、うど、たらの芽、こしあぶら）、シカ肉	出荷協議会（シカ肉は加工所から）
夏	じゃが芋、からいも、トマト、地きゅうり、にがうり、なす、たまねぎ、ピーマン、かぼちゃ、にんにく、シカ肉（村外）、なし、カライモ、トマト	出荷協議会と球磨郡内産
秋	生椎茸、栗、なし、アピオス、ヤーコン、大根葉（平家の赤大根）、ゆず、こしょう、椎茸、シカ肉	出荷協議会と球磨郡内産
冬	里芋、大根、聖護院大根、平家の赤大根、白菜、ほうれん草、チンゲン菜、シカ肉、（村外品）里芋、白菜	出荷協議会と球磨郡内産

表-10 加工品（村内）

店舗名	産品	生産場所等
五木茶屋	栗饅頭（9～11月限定）、お茶（玉緑茶：茶）乾燥椎茸（生椎茸期以外）かおり豆腐、木工品（まないた・工芸品）、焼物	自家製（栗自家、小麦国産）自家製のみ五木産
道の駅「山の幸」	山うに豆腐 ヤマメの甘露煮 山椒味噌、手作りこんにゃく、饅頭（栗、よもぎ、栗入り、うぐいす）、漬物（梅干、大根葉漬けのにんにく醤油漬け、大根ピリ辛漬け、ラッキョ酢漬け）、パイ饅頭、豆腐、蒸しパン、鶯もち、豆腐味噌漬け、木工品（ヒノキ、ケヤキ）、ゆずジャム、ゆず胡椒、ゆずゼリー	五木屋本舗（五木産）五木村内（出荷団体）瀬目マロン会：材料は瀬目マロン会参照五木村内



瀬日マロン会の 季節ごとの 代表的な産品	(春) ヨモギ饅頭、ヤマブキ佃煮 (夏) ウリ味噌漬け、生姜味噌漬け (秋) こんにゃく、栗饅頭 (冬) ゆず甘露煮	ヨモギ、やまぶき、ウリ、 柚子、栗、山椒(五木)、 醤油(人吉)、国産小麦、 生姜(東陽)、味噌(人吉)、 芋(五木、県内)、カシ松 灰(五木)、小豆(北海道)
九領庵	豆腐、厚揚げ、山うに豆腐(シソ味、唐辛子、ゆ ず味、キムチ味、しょうが味、黒ごま味)、五木豆 腐のもろみ漬け、豆腐の味噌漬け 等々	大豆(国産)、味噌(自家、 国産大豆で委託生産)、シ ソ(愛知)、黒ごま(国産)、 唐辛子、ゆず(五木)、生 姜(東陽)、大麦(国産)、 大根(宮崎)、人参(国産)

### (3) 五木村の生活の現状、五木の特徴(住民ヒアリングから見てきた現状)

2009年9月18日(金)から20日(日)に渡り、五木村の頭地、野々脇、九折瀬、下谷、竹の川の5地区で合計16人(頭地1人、野々脇6人、九折瀬4人、下谷4人、竹の川1人)から調査票を基にインタビューによる聞き取り調査を行った<sup>3)</sup>。以下、住民ヒアリングから明らかになったことを抽出的に概観する。

#### a) お堂にまつわる行事

五木村では、集落毎に違う仏像等を祀った特色のあるお堂がある。地区の住民が維持管理をしており<sup>4)</sup>、現在でも各地で堂まつりが行われていることが確認された。野々脇では薬師さん、祇園祭、九折瀬及び下谷ではハルキトウ(春祈祷)やアッカグラ(秋神楽)、八原(九折瀬の一部)では水神、観音、ゴヤをいっているとのことである<sup>5)</sup>。しかし、以前よりも盛んに行われなくなったことを惜しむ声があった。

#### b) 葬祭

葬祭については、住民の話から、土葬が比較的近年まで行われていたことが明らかになった<sup>6)</sup>。土葬の際には、集落で朝から男性が竹を切ってきて棺桶を作り、それに年輩の者が金や銀の切り紙をして装飾をする。女性は御斎料理を作っていた。五色の旗も作り、それを掲げて棺桶を墓場まで運んでいた。現在は火葬場が人吉にあるため、人吉の葬祭場で葬式を行うのが主流とのことである。

#### c) 講銀

下谷地区では、昔は板木の薬師講(8日)や下谷の不動講(28日)の際に寄り集まって講銀を行っていたという話が聞かれた<sup>7)</sup>。講銀の仕組みは、次のようなものである。地区の8軒の家で1,000円ずつ出し合い、くじを引いて当選した家は集めた掛け金を全部受け取る。その家は翌月から100円多く持つて来ることになり、当選の権利はなくなる。場所は毎月各自の家を持ち回りで行うというものである。元々下谷地区では28日は毎月感謝の気持ちで仕事をせずにお堂の不動明王を参る日であったため、その祭日の行事であったと考えられる。「良いものだったが、10年前くらいで途絶えてしまった」との声も聞かれ<sup>8)</sup>、地区住民の親睦を深める機会となっていたことが窺える。

#### d) まじない—民間療法の存在

調査対象者のうち2人からは、「まじないで人を治す」という話が聞かれた<sup>9)</sup>。まじないに関する口述は今回の調査の中で他8名からも聞かれた。带状疱疹に息を吹きかけると治る、出産後に乳房が張るのを治す、痰の塊を取る、血止め、くじき、ぎっくり腰に効く、等である。実際にまじないで人を治す人がおり、それが複数の人の間で信じられていると

いうことは特筆すべきことである。

e) 転入者（子育て世代の主婦、Uターン者）のニーズと受け入れ

村営団地には、村としては比較的若い年齢層である子育て中の30代の夫婦がまとまって住んでいる。ここは定住促進団地であり、夫が五木村で勤務するために村外出身の妻が転入してきた世帯が入居している。ここでは、五木で生まれ育った高齢者が多い他の集落では聞かれない話が聞かれた<sup>10)</sup>。「五木には土地や公園がなく、子どもがのびのび遊べる場がないので、公園を作ってほしい。室内遊びばかりで体力がつかない」、「病院が不便。小児科、産婦人科が人吉まで出ないとない」、「常会にはほとんど夫が出ているため、以前から集落に住んでいた人たちとの交流がない。入りづらい」、「仕事がないし、外に出る人が多い」、「夫が公的機関勤務でなければ五木には来なかった」、「図書館で子どもの絵本が借りられない」、「五木の政策は年配者中心で、若い層の声を吸い上げる場がない」といった様々なニーズが出てきた。

他にも家族連れのUターン者からは、村民とのコミュニケーション不足で家族には集落のことがわからないままで困っているという話が聞かれた。長く五木に在住する者の声では「人口が増えるのは大歓迎」という話があったが、よそから来た転入者にとっては受け入れの素地、場がないように思われ、入りづらさを感じる部分があるようである。

また、五木在住者の村外へ他出した家族は年に数回帰省することはあっても、村へ戻ってくる予定はないという声がほとんどであった。

f) 移住の意向

移住の意向は、高齢者は「ない。慣れ親しんだ土地だから。五木の生活は、空気がうまいし、農作業をして体を適度に動かすから健康にも良い」、新たに外から来た転入者（若い層）は「移り住みたい」とはっきり分かれた。ただし、高齢者世帯では、40～50歳代の息子が結婚しないため、子供もおらず将来に対する展望が描けない様子も見られた。

g) 失われた希望、活気

行政に期待することについて尋ねたところ、ある高齢者は、「期待も何も、村中が何をしようが人口も子供も減って活気がない。椎茸を作っても猿、鹿に食べられるし何もしない方が良い<sup>11)</sup>」と話していた。猿、鹿、猪による被害は至る所で聞かれた。「自給自足できないので楽しみが奪われる。やる気がなくなるので、野獣対策をしっかりとしてほしい」、「お年寄りの少しの収入にもできない。彼岸花まで食べられている<sup>12)</sup>」他にも「振興計画にも掲げたインフラ、農地整備、人、経済の活性化。現状では、観光立村を掲げているが、五木らしさが弱い。子守唄の里として、訪れる人々に感動を与える住みよい元気のある村にしてほしい<sup>13)</sup>」との発言も聞かれ、現状では村民は「将来に展望が持てないため、何とか村を活性化させて村の活気を取り戻したい」と望んでいる模様である。

#### 4. 分析と課題（現状から出てくる課題の抽出）

##### (1) 五木の観光の課題（特に来村者において）

中高年層に人気で、若年層には人気のない傾向がある。将来を見据えて若年層にも目を向けた取り組みが必要である。都道府県別の来村者数は半分が熊本県内で九州外からは全体の1割弱であり観光地としての全国的認知度は高くない。また、市町別では熊本市が一

番割合は多いが3割しか来ておらず、ほとんどが近郊の市町に固まっている。観光旅行に来たというより、近くの町に遊びに来た程度でしかなく、熊本市や県外の大都市からの来村者を増やしていくためにも大都市へ向けた宣伝も必要だが、それらを受け入れる宿泊施設の充実を図る必要もある。

観光客属性においては、配偶者のみと来るパターンが多いことから、家族連れや若年層には魅力が薄い場所であると判断できる。家族連れや若年層でも楽しめる場所を作っていくことが必要となる。

## (2) 物産に関する分析、課題

農林業において特筆すべきは、鳥獣害があまりに酷く、生産者がやる気を失っている状況である。林業においても、産業としての競争力を全く失っているが、治水などの面からも植林した山は守っていく役割を担っており、森林組合の持っている役割は大きい。農業では、ヒアリング調査などの中から潜在的魅力をもつ農産物が散見された。例えば風味豊かな茶葉、伝統的に栽培され土着の平家の赤大根（秋の祭りの漬物となる）。またこんにゃく材料となる村内産のこんにゃく芋等々、まだ外に素材が眠っている可能性がある。

一方、産品や加工品において行った物産販売所での調査では、五木茶屋では、集落で生活することを持続可能にする事業モデルで、自家製の栗饅頭（あんこは使わない栗の実のまんじゅう）、お茶（人気のぐり茶）、生椎茸を地元の産品を年間連鎖させることに成功されている。また、九領庵は、「山うに豆腐」はすでに全国的にもその名は知れており、代表者は地元出身で、村外勤務後里帰りし、豆腐店（五木物産本舗）が経営をつがれた。平家の落人伝説とも結びつく、伝統的な保存食を継承という点で本物志向の顧客からのネット販売も好調。その他、29名中25名が村内在住者を雇用にも貢献されている。また、瀬目マロン会は、集落の維持や生きがい作りや食の継承という役割を担われていたが、現在高齢化等により販売所は休止中で、規模を縮小して道の駅等への出品のみ。しかし、マロン会の方々の持つ加工の技術や味は村内でも評判になっている。

村の中心部に道の駅（山の幸）は村内では最も集客が多い施設だが、店頭にある産品で村内産は1割位である。1次産品については販売農家が少なく、鳥獣害の被害も大きい。シカ肉は最近加工所も整備され今後これを拡充されている。

以上のような状況から、大量の産品を売っていくという方向よりも、地元根づく質の高い産品の掘り起こしや、その継承を目指す課題が見えてくる。

## (3) 住民ヒアリングから得られた村の特徴、課題

五木には、昔から堂まつりやまじないといった民間療法、土葬などの民俗的な習慣があり、一部では未だにその習慣が残っていることが明らかになった。

かつて堂まつり、講銀等の集落の行事は住民が寄り集まる「場」であり、コミュニティ形成の場であった。そこでは行事を通して住民間の親睦が図られ、活気の源となっていたが、現在では衰退してしまい、長く五木に在住する者の間ではそれらを惜しむ声がある<sup>14)</sup>。

現状としては、働く場、産業が乏しいため、人口流出が起こった後、出て行った五木村出身者が帰る場も予定もない。



猿、鹿、猪等の鳥獣害がひどく、農産物や物的人的被害のみならず、畑を作っても全て被害を受けるため、住民のやる気を損なうという面で悪影響を及ぼしている。

水没予定のため転出を余儀なくされた方たちのための代替地には、区画で区切られた住宅のためのスペースしかない<sup>15)</sup>。もともと農業を生業としていた特に高齢者の村民にとって、農地が造成されることは悲願であり、子育て世代には子供の遊ぶ場所が望まれている。

現状では、観光立村を目指しているが、「五木らしさ」を打ち出す場が弱い。元からの住民だけに住みよい場でなく、「五木に来たい」と思わせる場にする 것도肝要である。

よそから来る転入者を受け入れる素地づくりが必要である。集落でよそから来た転入者（特に子育て中の世代）や、Uターン者が馴染みやすいよう声を取り入れる工夫が必要である。

## 5. 提 言

以上の分析から、村に元からある観光資源と住民生活を結び付け、村を活性化させるシンボルとして、水没予定地だった場所に茅葺屋根の住宅を数軒建て、「茅葺の里」を作りたい。この茅葺の里は「五木らしさ」がキーワードである。戦前までは、五木村のほとんどの家が茅葺屋根であった<sup>16)</sup>。現在は道の駅子守唄公園の横に1軒現存するのみであるが、茅葺屋根の住宅は五木を代表するものである。

「茅葺の里」には大きく3つの機能が期待できる。1つ目は村外の観光客を呼び込む場としての機能、2つ目は村内に新たなコミュニティを形成する場としての機能、3つ目は村民と村外の人を結ぶ場としての機能である。具体例を以下で述べる。

### (1) 村外の観光客を呼び込む場としての機能

#### a) 茅葺の家を宿泊施設とする

現在、五木には宿泊施設が少なく、宿泊観光客の受け入れが限られている。古民家のよさを活かした宿泊施設とすれば、滞在型観光に道を開くことができ、村への経済効果も大きい。

#### b) 五木の民俗の紹介

よそにはない五木の民俗を打ち出し、観光客を惹きつける資源とする。五木に古くから伝わるまじないや講銀体験ができる場を作る。また、お堂の紹介、以前行われていた土葬の際の棺桶づくりや飾り、五色の旗を展示する。そして、集客イベントとして、集落ごとの太鼓踊り、堂まつり、厄除け等を順に主催する。これらは、五木村の集落内の連帯感を高め、集落の伝統芸能を知る人の知識、技術が受け継がれていくことにも繋がる。

### (2) 村内に新たなコミュニティを形成する場としての機能

#### a) 「子育てしゃべり場」、子供の遊び場

五木の施策に子育て世代の声が反映されづらい現状があり、その解消のために、茅葺の里内に子育て中の人が集まって話せる場を作る。そこでは、子育て中の特に転入者による村内で役に立つ情報や悩みなどの情報交換を行えるようにする。

また、子供の遊び場がないという声もあるため絵本の読み聞かせや、語り部による五木

の昔話会を開いたり、高齢者と子供とが交流したりする場所を設ける。スタッフを配置し、時には保健師の指導も受けられるようにする。悩みを話し合い、その声をスタッフが村役場に繋ぎ、施策に生かすようにする。(もしくは、アンケートを入れる目安箱を設置して定期的に村が回収する方法も考えられる。)

b) 五木のお袋の伝統の味を繋ぐ料理教室

自然に育まれた自給自足生活の家庭の味噌、醤油、こんにゃく、饅頭、漬け物、家庭料理等、伝統食を後世に残す取組を進める。村内集落毎の横の連携を図り、継承を行い、保存していく。

ここでは、地元の高齢者と若い夫婦の交流もでき、料理の仕方を習うことができる。また、ここに様々な集落の人が集まるため、村内の集落相互の交流にもなり、普段住んでいる集落では聞きづらいことを他の集落の人に聞ける可能性もある。地元の食生活改善推進員などが関わると効果的である。

(3) 村民と村外の人を結ぶ場としての機能

a) 五木を知って好きになる茅葺屋

茅葺屋根の民芸館等を移設整備して、併設で耕地化を行い、レンタル形式のクラインガルテンとして整備し、来訪した家族連れや若者などと地元の農民が集い、農業体験、生活体験することで、五木への理解を深める。五木は空気がおいしく、適度に体を動かして農作業をすることは健康に良いという村民の声があり、村外の人には「癒し」の効果が期待できる。

b) 五木村出身者を呼び戻すための雇用の創出

「茅葺の里」関連の仕事に従事する者が必要となり、地元で雇用の場を生み出すことができる。運営は村の住民が主体となった組織で行うことが望ましい。

このような雇用の場が創出されると、村民だけでなく五木出身で一度は外に出た人を呼び戻すことも可能となる。「ずっと住んでいた時にはわからなかったけれども、外に出たことで五木の良さがわかった」<sup>17)</sup>との声もあり、五木を客観的に見てきた人の視点は、村の振興策に資することができる。村民も昔の知恵が活かせることで自分の存在感を高められ、楽しみを持つことができる。

以上の提案が五木の活性化につながり、五木に住む人々が元気を取り戻して暮らせるようになることを祈念して終わりとした。

謝辞：本稿に関する調査研究では、五木村役場の方々、JA五木や五木村森林組合、五木村内の産品直売所関係者の方々、五木村の住民の方々、五木村来村者の方々に多方面にわたりご協力いただきました。特に、五木村役場ふるさと振興課田中良幸課長と五木村集落活性化支援員小木曾早苗さんには、ご多忙中調査全般にわたりご尽力いただきました。また、熊本大学政策創造教育研究センター河村洋子准教授には本稿の作成にあたり貴重な御示唆をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。



(付録)  
質問紙調査票 (1枚目)

### 五木村来村者調査票

(平成21年 月 日 時 分)

調査場所:道の駅駐車場

熊本大学では五木村の豊かな自然を生かしたまちづくりについて考えていくことを目的とした調査を行っております。その一環として、五木村を訪れた方々が村のどこに魅力を感じているのかを知り、観光振興をしていく上での課題や可能性を見出すためのアンケートを実施しております。個人情報(お名前やご住所など)は一切伺いませんので、お答えいただいた方を特定することはありません。ご協力のほどよろしくお願いいたします。何かご不明な点がございましたら熊本大学政策創造研究教育センター(担当者:長谷部俊之)までご連絡ください。  
(E-mail: hasebeak@kumamoto-u.ac.jp、TEL: 096-342-2037)

質問1. どちらから来られましたか。

\_\_\_\_\_ 都・道・府・県 \_\_\_\_\_ 市・町・村

質問2. 年齢、性別をお書きください。

年齢: \_\_\_\_\_ 才、性別: \_\_\_\_\_ 男・女

質問3. どなたと来られましたか。主に該当するものに○を付けて下さい。

①一人で来た ②家族・親戚と来た ③友達と来た ④仕事仲間と来た

②～④とお答えのかたは、何人ですか。自分を含めないで人数を教えてください。

\_\_\_\_\_ 人

質問4. 質問3で「②家族・親戚」と答えられた方にお聞きします。具体的にはどなたですか。該当するもの全て○を付けて下さい。

①父・母 ②配偶者 ③子供 ④孫 ⑤その他( )

質問紙調査票（2枚目）

質問 5. どの交通手段を使われましたか。該当するもの全て○を付けて下さい。

- ①自家用車 ②バス ③JR ④バイク ⑤その他( )

質問 6. 今回五木村に来られた主な目的は何ですか。

- ①観光のため ②仕事のため ③里帰りのため ④その他( )

質問 7. 質問 6 で「①観光のため」と答えられた方にお聞きします。五木村のことをどのよう  
うにして知りましたか。該当するもの全て○を付けて下さい。

- ①新聞 ②雑誌 ③チラシ ④インターネット ⑤テレビ ⑥ラジオ  
⑦知人から聞いた ⑧その他( )

質問 8. 今回五木村のどのような場所に行かれましたか(行く予定ですか)。裏面の地図  
の該当箇所に全て○を付けてください。

質問 9. 今回五木村以外の場所に行かれる予定はありますか。ある場合は所在地をお書  
き下さい。

- ①ない ②ある ( 市・町・村 )

質問 10. 五木村に来る前のイメージはどうでしたか。あなたの考えに最も近いもの1つ  
に○を付けて下さい。

- ①大変良い ②良い ③どちらでもない ④悪い ⑤大変悪い

質問 11. 五木村に来た後のイメージはどうですか。あなたの考えに最も近いもの1つ  
に○を付けて下さい。

- ①大変良い ②良い ③どちらでもない ④悪い ⑤大変悪い

質問 12. 質問 11 の理由を自由にお書きください。

--

質問紙調査票（3枚目）

質問13. 日帰りですか。それとも宿泊ですか。

- ①日帰り      ②宿泊(泊日)

②とお答えの方は、五木村内、五木村外どちらに泊られますか。後者の場合は宿泊場所をお書きください。

- ①五木村内      ②五木村以外(市・町・村)

質問 14. お土産は買われましたか(買われる予定ですか。)

- ①買った / 買う予定      ②買わなかった / 買わない予定

質問 15. 質問 14 で「①買った/買う予定」と答えられた方にお聞きします。その商品は何ですか。

- ①やまめ ②お茶 ③五木の掛け干し米 ④豆腐の味噌漬 ⑤椎茸 ⑥漬物  
⑦木工品・陶芸品 ⑧その他( )

質問 16. 昼食はどちらで食べられましたか。

- ①五木村内の飲食店 ②五木村以外の飲食店(市・町・村)  
③持参した ④その他( )

質問 17. 五木村に対して何か要望があれば教えてください。

※ご協力ありがとうございました。

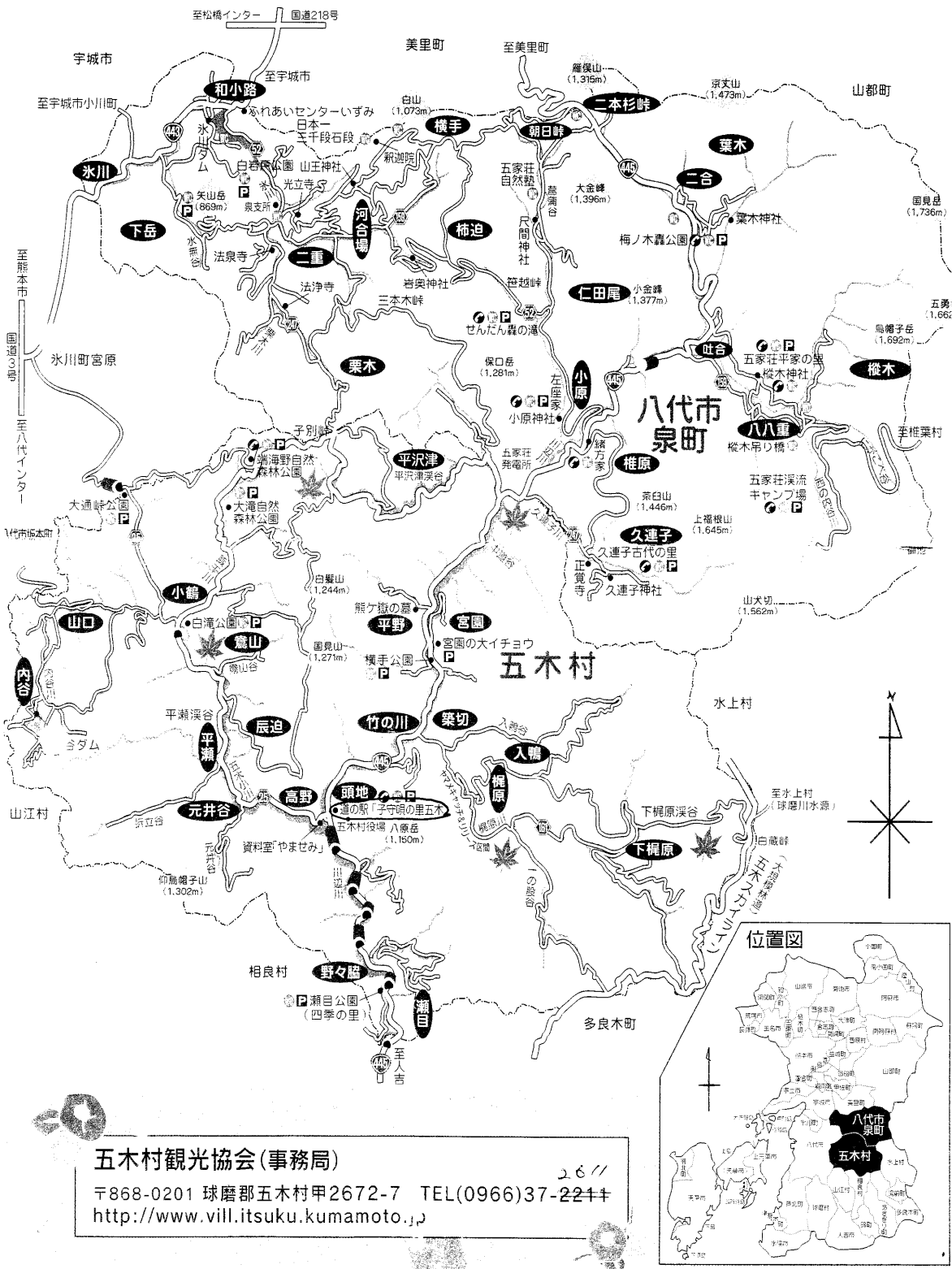
◎質問 8 の該当箇所を右の地図に○で付けて下さい。 → → → → → → → → → →

**九州中央山地国定公園・五木五家荘県立自然公園**

# 五木・五家荘マップ

- 国道445号
- 国道443号
- 県道宮原～五木線
- 県道小川～泉線
- 県道縦木～河合場線

- 県道久連子～落合線
- 県道五木～湯前線
- 駐車場
- 公衆トイレ
- 公衆電話



五木村観光協会(事務局) 2611  
 〒868-0201 球磨郡五木村甲2672-7 TEL(0966)37-2244  
<http://www.vill.itsuku.kumamoto.jp>

農産物、製品の現状調査項目一覧

## 農産物、製品の現状調査項目一覧

### ○農業等の調査

#### (土地の状況)

田・畑・樹園地・山林・その他・放棄地の広さ（反・畝）

従業者（他出者の手伝い含む）

作業者（続柄）・作業割合（％）・同居・他出・本業・手伝い・手伝内容等

#### (地元のお薦め)

産物、景勝地や観光地、習俗

#### (農産物、林業、水産物・加工品)

面積（反・畝）または収量

消費の区分（割合）

- ・自家消費（％）、互惠・交換（％）、市場出荷（％）、販売先、割合の変化
- ・鳥獣害の被害の状況

### ○直売所・物産館・加工品関係ヒアリング項目

#### (店等の形態)

農産物及び加工品の販売のみで全て仕入れて販売

自社工場等の加工品もあり

販売に加えて食堂も経営

定期的に地域の生産者を巻き込んだイベント等を開催

#### (店の情報化等)

POSシステムを導入

POS分析による商品検討を実施

#### (食堂がある場合の状況)

メインコンセプト

メニューコンセプト

地産地消率

- ・村内、周辺町村、県内、国内、輸入

1日当たり客数（地元率

- ・地元率

その他（加工直売所との関連）

#### (扱い品目（主に直売所向け）)

村内産品

- ・一時産品（春夏秋冬）、加工品他、村外品

仕入元（店、集落単位等）

品目割合

売上割合

#### (代表的な加工品)

原材料及び調達先（村内調達率）

村外への販売有無先（販売率・数量・金額等）

web販売有無モール名

## 五木村の生活の現状、五木の特色把握のための調査項目一覧（1枚目）



○五木村における集落維持機能に関するヒアリング調査票

(地域の状況について)

人口 (人)、世帯数 (戸)、2～3世帯同居 (戸)、高齢者単独世帯 (戸)、小学生 (人)、中学生 (人)、高校生 (人)

(暮らしの変化について)

木場作について  
炭焼きについて

(お堂と堂まつりについて)

お堂・堂まつりについて  
話し合いについて  
その他の御堂での行事や管理  
・行事名、時期、具体的な内容  
どんな方が参加するのか  
・行事名、参加人数、世話をされる人

(自治組織)

集落にはどんな自治組織があるか  
・組織の有無、世話をされる人、年何回、開催場所、行事・活動内容

(共同作業)

集落にはどのような共同作業があるか  
・共同作業の有無、参加人数、世話をされる人、年何回、開催場所、行事・活動内容  
共同作業の今後について  
作業名と今後の状況について  
病気や困りごと災害の時、ご近所でどのような助け合いがあるか

(健康や医療について)

病気や怪我をした時について  
診療所の役割について  
自然のもの(薬草など)を活用して病気や怪我の治療をする習慣について

(その他)

地域内で困っていること  
住民がいない空き家を地域で管理されている例について  
地区の人口が減少していった場合について(他の集落との再編や移転)  
地域外に出て行った方は、盆正月には戻ってくるか  
五木村の観光について  
行政に対しての要望

(家族に関する調査)

集落に住んで何年になるか  
以前はどこに住んでいたか  
家族の構成と職業について  
・続柄、年齢、職種、職業形態、開始時期、勤務地  
他出者について  
・続柄、他出、転出先・時期・理由、帰省の回数・理由、将来の帰郷の有無・理由  
以前に現在とは別の職業に就いていたことのある方について  
・就職した時期退職した時期、仕事の種類、場所、その仕事に就いた理由、退職した理由

(交通手段について)

集落外への交通について  
・行き先、目的、交通手段、利用方法、頻度  
医療機関・福祉機関への通院通所について  
・行き先、交通手段、利用方法、頻度  
買い物について  
・行き先、交通手段、利用方法、頻度

五木村の生活の現状、五木の特色把握のための調査項目一覧(2枚目)

**(農業等について)**

土地の状況(反・畝)について

・田、畑、樹園地、山林、その他、放棄地

従業者について

・作業者(続柄)、作業割合、同居他出、本業手伝い、手伝い内容

地元のおすすめ

・産物、景勝地や観光地、習俗祭り、その他

鳥獣害等の被害

**(農産物、林業、水産物・加工品)**

面積(反・畝)または収量について

消費の区分(割合)について

・自家消費(%)、互惠・交換(%)、市場出荷(%)、販売先、割合の変化

鳥獣害の被害の状況について

**(健康や医療について)**

体の不調を感じたり、病気になった時について

・「病院」や「医師(お医者さん)」とは、ご自身にとってどういうものか

・「医療」、「病院」、「医師」に期待すること

現在、ご自身が利用できる医療(病院や医師などを含む医療資源)について

・良いところ、悪いところ、改善してほしいところ

・五木村では、薬草などの自然のものを活用して病気などを治す習慣があると聞くがその習慣はどのような目的でされていたか

・どのような方がされるか

・どのくらい昔からされているのか

ご自身にとって「健康」とは、どういうものか

五木村で生活することと、「健康」とはどのような関係があるか

**(生活について)**

地域の方と寄り合う機会について(お茶のみ、出かけたりなど)

病気や困りごと、災害の時、ご近所どうして心掛けてされていること

ゴミ処理はどのようにしているか

水回りの管理はどうしているか

(頭地のみ)移転した後、川との関わりの変化

(頭地のみ)移転して便利になったこと不便になったこと

(頭地のみ)近所の助け合いについて変化したこと

現在住んでいるところから、移り住みたいと思うか、移り住みたくない場合の理由は何か

この地区に村外から移住者がきたら歓迎するか

この集落の良いところ

現在の楽しみ

生活する上で現在困っていること

行政にどういうことを期待するか

## 注

- 1) 資料は、五木村民俗調査団編 『五木の民俗』 五木村役場、1993年、「ふるさと五木村づくり計画（案）」、五木村振興計画（仮称）素案。  
(<http://www.step-i.co.jp/project/itsuki/index.htm>.) 五木村役場「五木村勢要覧」2009年による。
- 2) 資料は九領庵自社総合カタログ、「瀬目マロン会」四季の里HP  
([http://www.geocities.jp/itsuki\\_mura/maron/about.html](http://www.geocities.jp/itsuki_mura/maron/about.html)) による。
- 3) 調査票は区長用、個人用の二種類あり、区長用では①集落の状況、②お堂を中心とした行事やお祭り、③地域を支える自治組織や共同作業、④生活に関すること、個人用では①家族（他出者の支援等）、②交通手段、③農業、④健康や医療、⑤その他生活に関することについて質問項目を作成した。
- 4) 先行研究 湯川洋司編「九州山地五木谷における堂を中心とした村落自治の伝統に関する民俗学的調査研究」2004 P 1でも、「熊本県球磨郡五木村では、ほぼ集落ごとに配置された小さな祀堂（観音堂、地藏堂、薬師堂など）が村落住民結集の原点となり、また精神的統合の核として村落生活にきわめて重要な役割を果たしてきた。（中略）しかしながら、その一部は、ダム建設計画に伴う集落移転等により、すでに移転したり廃絶したりしている。」と指摘されている。
- 5) 頭地代替地では、現在では以前の集落のお堂はないが、昔からの行事を復活させ、月見の際に綱引きを行っている。（頭地Aさん談）
- 6) 頭地では、5年位前が地域での最後の土葬だったとの話が聞かれた。（頭地Aさん談）
- 7) 下谷 Bさん談
- 8) 下谷 Bさん談
- 9) 九折瀬 Cさん談、野々脇 Dさん談
- 10) 下谷 Eさん談
- 11) 九折瀬 Fさん談
- 12) 各地区の区長談
- 13) 頭地 Aさん談
- 14) 2009年8月16日に実施した予備調査のG氏のヒアリングと併せ、村民の声から、かつてはお堂が信仰の対象としてのみ存在していたのではなく、人々の拠り所であり、コミュニティ形成の場として機能していたことが示唆された。
- 15) 五木村のダムに伴う集落移転にあたり、移転前には曖昧だった家の境界が直線として場所を区切るものとなり、その結果「遊んでいる土地」が不在となって、畑や残余的な場所で農作業をして忙しかった高齢者も所在なく家にこもるようになって人の行き来が以前よりも少なくなってしまうということは先行研究にも指摘されていることである。（植田 今日子「ダム移転集落による計画空間の再定義—川辺川ダム移転集落高野の実践を事例として—」『ソシオロジ』52(2)、(160) 2007年 P21～37）
- 16) 五木村民俗調査団編『五木の民俗』五木村役場、1993年 P243
- 17) 竹の川Hさん談

(2010.1.21 受付)

STRATEGY FOR REVITALIZING ISTUKI VILLAGE WITH ITS  
LIVELINESS AND UNIQUENESS : A PROPOSAL FOR BUILDING A  
SUSTAINABLE COMMUNITY

Kaori UCHINO, Akifumi HORIGUCHI, Nguyen Thi Thu Huong, and Toshiyuki HASEBE

With emphasis on building a sustainable community, this paper aimed to propose a response for the revitalization of Istuki village in Kuma area, Kumamoto-prefecture. Especially, focusing on what are needed for the villagers lively live their lives in a sustainable manner, we explored problems and latent resources in the village through three different research activities; a visitors' survey, surveillance of souvenir shops, and interviews with the villagers. As results of these research activities, we identified intervening (problems) or alleviating factors (latent resources) for the village revitalization in three perspectives; tourism, local products, and lives of the villagers. Based on the identified factors, our main proposal is to create the new community named "Kayabuki no Sato" (meaning "Thatched Home"), in which the villagers can mix with visitors, promoting uniqueness of Istuki village such as traditional lifestyles and folk culture and exposing latent resources of tourism and local products to people visiting the village.